

九州大学応用力学研究所 正員 潤田武人

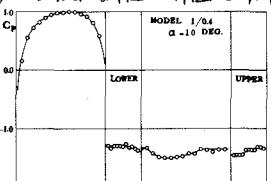
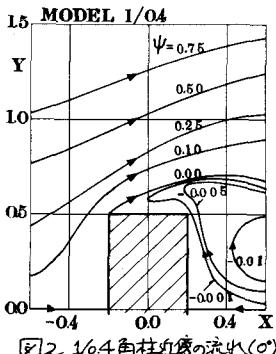
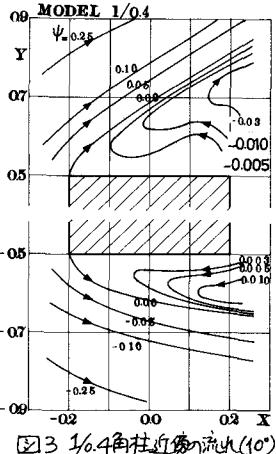
1. まえがき 前報¹⁾においては、一様流中にある種々の断面比を持つ角柱の水平迎角零度附近における平均流れの特性を述べた。その中で特にギャロッピング振動に関連して、完全剥離型角柱に特有な負の揚力傾斜の発生の要因として、角柱下面の低圧の保持機構を知る必要があることから、正の迎角(10°)を与えた正方形角柱に関する実験を行った。そして下面後縁が剥離領域の中を流れの遮断効果を持ち、それが下面の低圧を保持せしめることになると報告した。本報では、また同じ完全剥離型角柱でも断面形状が薄くギャロッピング振動を発生せざる正の揚力傾斜の特性を持つ角柱のまわりの流れを前報と比較して述べる。そして角柱断面化と平均流れの相互の関係を総合的に把握しようとすることである。次に、カルマン渦生成や、渦動振現象の基本的な問題を明らかにするための第1歩として非流線型物体近傍の流れの特性を知ることは重要である。ここではまず静止角柱まわりの非定常流速の測定を行った結果を報告する。その結果から角柱まわりの非定常流線を求め流れを考察する。

2. 実験方法 平均流速、非定常流速の測定にはタンデム型熱線プローブを使用する。供試角柱は断面比 $1/04$ ($15'' \times 6''$), $1/1(15'' \times 15'')$ である。一様流速は $6.90''/\text{sec.}^2$, レイノルズ数は 7.14×10^4 である。流速の測定法や流線の求め方については文献²⁾を参考にされた。

3. 実験結果 3.1. $1/0.4$ 角柱まわりの平均流れと表面圧力、まず図1に水平迎角 10° における角柱表面の定常圧力 $C_p (= p - p_\infty) / (\frac{1}{2} \rho U^2)$ を示す。下面と背面の圧力は後縁においては連続的にならぬが、上面と背面の圧力は後縁において不連続となる。また上面と下面の圧力差から正の揚力傾斜となることが本図からわかる。

図3に 10° の場合の流線を示す。 $1/1$ 角柱では流れが下面後縁で遮断され下面付近に独立な循環流が形成されたが、 $1/0.4$ 角柱ではこのような循環流はござらず流線は角柱背後とながり、流れの遮断効果はありません。従って圧力は背面とほぼ連続的にならぬ。上面後縁では、 $1/1$ 角柱下面後縁の場合ほど流れの遮断効果は顕著ではないが流線は後縁付近を通過後上面に沿わざ大きな曲率を持っており、これがも流れ難いことを示すものと考えられる。すなはち上面と背面の圧力の不連続性と対応している。また角柱上下面の自由剪断層付近の流速は $1/1$ 角柱では下面側がより加速されながら $1/0.4$ 角柱では逆に上面側が加速されている(図は省略する)。

3.2. 静止した $1/1$ 角柱まわりの非定常流れ、図4に角柱まわりの各位置における最大非定常流速の振幅の実効値の等分布図を示す。その中でも最も大きい値は一様流の50%にも達し、しかも自由剪断層が後縁近くにあり角柱背後に流れ込む部分と、 $X = 2.0$ 付近で上下の流れが干渉し合う部分の2箇所に分れて存在している。次に非定常流速の主流方向成分を揚力の位相と対応させて測定し、定常成分と重ね合わせてその結果から瞬間流線を定量的に画いて図5A～5Fに示す。従って観察座標は角柱に固定されている。図は上向を最大揚力のとき($\theta = 0^\circ$ (5A))とし、各々 25° (5B), 45° (5C), 90° (5D), 135° (5E), 180° (5F)だけ選出した瞬間の流線で、流れの半周期において示す。最大揚力からわずかだけ選出した5A→5Bへの流れの変化が著しい。上面前縁から出た流線 $\psi = 0$ は2個の渦を取り囲んで背面で閉じているが

図1 $1/0.4$ 角柱の表面圧力図2 $1/0.4$ 角柱近傍の流れ(10°)図3 $1/0.4$ 角柱近傍の流れ(10°)

5D では背面の渦がわがむだけ後方に移動し、逆に下前面から出でる渦が背面で閉じて13。しかし下面側の渦は先に後方に移動して放出された渦が比較的近くにあるので、相互作用が強く、いったんその領域を狭くある(5C, 5D)ようである。さらに移動あるとその渦は後流の渦列へと編成され(5E), その過程で下面側の $\psi = 0$ の領域は次に放出される渦として、徐々に発達しながら(5F)には内部の渦が2個に分離して(5F), 流れの半周期を終え丁度 5A と X 軸に対して対称な流れとなる。

4. 結論 完全剝離型角柱の中でも微小迎角の範囲で正の揚力傾斜を示す角柱のまわりの流れ、および圧力分布を調べ、負の揚力傾斜を示す場合と比較して述べた。また静止させた正方形角柱のまわりの非定常流線を書き、カルマン渦の生成過程について述べた。

[文献] 1) 溝田武人; 角柱まわりの流れ, 1976, 土木学会年次講演会, I-209, 2) 溝田武人, 国島厚; 丸太柱の所産, 1976, 第45号, 35項

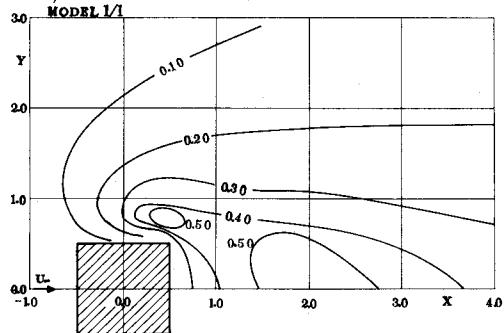


図4. 最大変動流速分布 (r.m.s値)

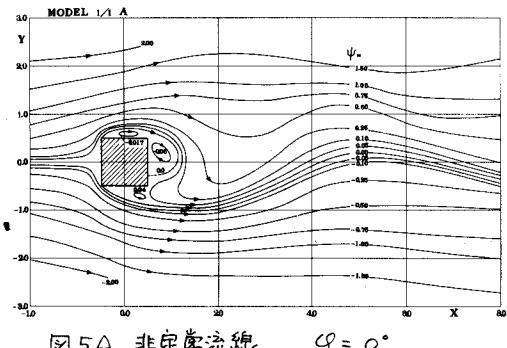


図5A. 非定常流線 $\vartheta = 0^\circ$

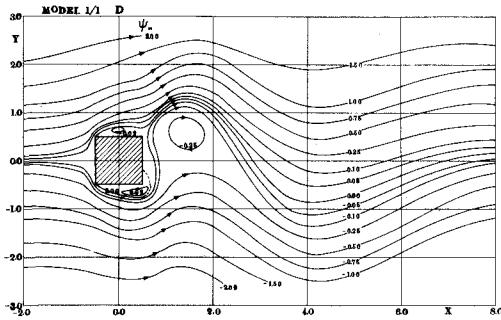


図5D. 非定常流線 $\vartheta = 90^\circ$

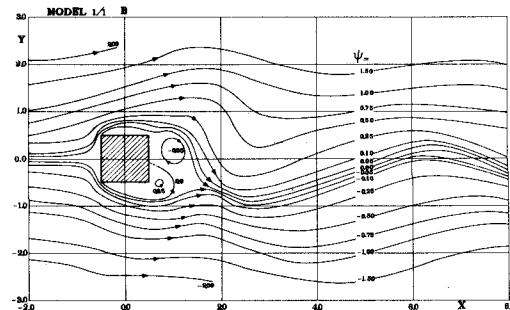


図5B. 非定常流線 $\vartheta = 25^\circ$

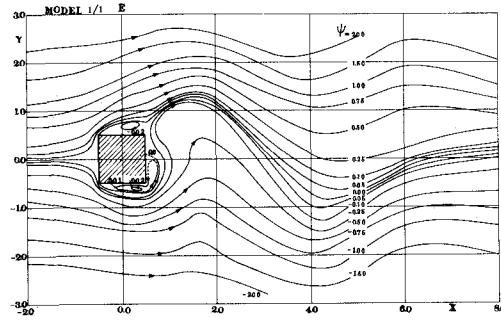


図5E. 非定常流線 $\vartheta = 135^\circ$

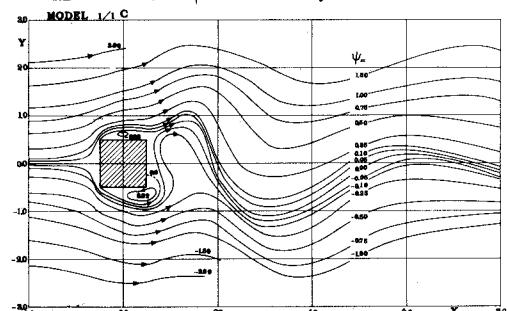


図5C. 非定常流線 $\vartheta = 45^\circ$

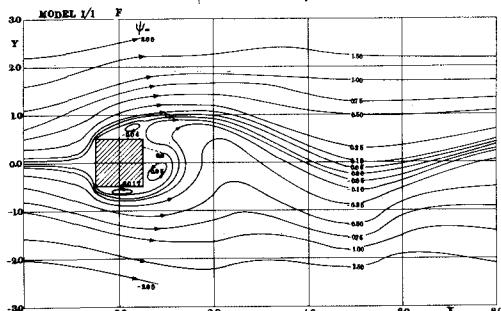


図5F. 非定常流線 $\vartheta = 180^\circ$